

Title	ステファヌ・マラルメ「ゴシップ1875－1876」『アシニーアム』(5)(翻訳)
Sub Title	Stéphane Mallarmé : «Gossips 1875–1876», Athenaeum (5) (traduction)
Author	原山, 重信(Harayama, Shigenobu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.56 (2013. 3) ,p.55- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20130329-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ステファヌ・マラルメ
 「ゴシップ 1875-1876」『アシニアム』(5)
 (翻訳)

原 山 重 信

承前

22. 1876年1月16日——1876年3月18日

文学ゴシップ

全く現代的な事柄に関わる著作を過去に求めることほど興味深いものはない。それは、リズー氏〔ママ^{a)}〕というこの完璧な愛書家が、既に独自の名前をもっている目覚ましい小さな回顧的叢書¹⁾の中に、アンリ・エティエンヌ^{b)}による『フランクフルトの見本市 (16世紀の万国常設博覧会)』、ニコラ・デマレ^{c)}による『嘗てのイギリスからフランスへの接続、或いはカレー半島』そして『フランス人たちが将来、平和に暮らすようにするための彼らへの忠告^{d)}』(1756〔ママ〕)のような作品を刊行することで、取り組んでいる魅力ある活動である。しかしながら、この博識な愛書家は17世紀の『悪魔』に関する偉大な書物、即ち、ジョワシャン・デュ・ベレーの『さまざまな田舎の遊び』と共に、同時に、宗教的ないし文学的、謂わば一般的な興味の諸問題に取り組んでいる。

1) このイジドール・リズー (1835-1894? 稀覯本蒐集家) の蒐集に関するメモは、『アシニアム』に取り上げられなかった。しかしながら、ここに引かれた書の数々は頗る興味をそそる。—『フランクフルトの見本市』は初め1574年にジュネーヴで、『フランクフルト、この市場』というタイトルで刊行された。—ニコラ・デマレの書は初め1753年刊行。既にここで英仏海峡の海底トンネルの可能性が問題になっていた。デュ・ベレーの書が古典的であるとすれば、悪魔

性の書に関しては同じように言うことはできないであろう。その完全なタイトルは、その名残を充分にとどめている。『悪魔性と男の姿、女の姿の夢魔（インクブスとスクブス）の動物について——この世には、人間と同様に体と心を持ち、人間と同様に生まれて死に、我らの主イエス = キリストによって罪を贖われて、救済も劫罰も可能な、人間とは別の、理性を備えた生き物が存在することを証明する』、R. P. ルイ = マリー・シニストラリ・ダムノ…著、原本に基づいて出版され、イジドール・リザーによりラテン語から翻訳された、未完作品、パリ、I. リザー、1875年、八つ折判、XVI-224p.—この書物には幾つもの版があり、1879年には英語に翻訳された。ユイスマンスが、近代の悪魔崇拜に割いた小説『彼方』（1891年）の中で、この作品を引いた〔マラルメの後期散文「重大雑報」の中の「魔術」に関わる〕。

- a) マラルメは「M. Lizeux」と綴っているが、正しくは「M. Liseux」である。
- b) アンリ・エティエンヌ（1531-1598）フランスの印刷業者、文献学者、ギリシア学者、人文主義者。プロテスタントを擁護し、ギリシア語辞典を編集。
- c) ニコラ・デマレ（1725-1815）フランスの地理学者。オースチン版（底本2）は「Desmaret」、新全集版（底本1）は「Desmarets」と綴られているが、正しくは「Desmarest」である。
- d) 原題は「Remonstrance aux Français pour les induire à vivre en paix à l'advenir」であるが、フランス人読者には自明のことなのか、16世紀の古い綴りのままであり、現代フランス語の綴りでは、「Remonstrance」は「Remontrance」、「advenir」は「avenir」となる。しかも、「1756」という年代は「1576」の誤りである。

23. 1876年1月30日——1876年2月5日

文学ゴシップ¹⁾

IX (a) 今のところパリの著名な文学者たちの最も多くを集める雑誌、『文芸共和国』の第2号が、その国際的プログラムに忠実に、ロシア詩人プーシキンの、同国人小説家イヴァン・ツルゲーネフによる翻訳を公にした。しかしながら、この文集が扱おうとしているのは何よりも英文学であり、その第1号にはスウィンバーンの詩²⁾の版が掲載され、片や第3号は同じ詩人によるフランス語で書かれた詩を提供することになろう。この詩は母国語でも最も扱いが難しい韻律であるセクスティーヌ³⁾の韻律で書かれている³⁾。こうした珍しいものが現われるのがパリでは切実に待望されている。

- 1) 『アシニアム』1876年2月5日号、「文学ゴシップ」(p.202)、及び後出、p.96を見よ。
 - 2) 「巡礼者たち」。翻訳は、匿名だが、オーギュスタ・オルメスによるものである。
 - 3) 「ノクターン」。この詩に関しては、1876年1月27日付、2月11日付、マラルメのスウィンバーン宛書簡を見よ。—S. マラルメ『詩に関する言葉』、H. モンドールによる蒐集、発表、モナコ、デュ・ロシェ社、改訂増補版、1953年、p.114-116。および、マラルメ『書簡集』、第2巻、p.97, 104。
- a) セクスティヌとは、各6行、6詩節と3行のリフレインからなる、技巧を凝らした定型詩。

24. 1876年1月30日——1876年2月5日

文学ゴシップ¹⁾

IX (b) 政治は文学に勝^{まさ}っており、選挙²⁾の前日には何ら重要な新刊が出ないほどだ。しかし、『ル・シエクル^{ル・シエクル}』紙はゾラの偉大な小説に、毎日の各号の大きな紙面を割くことを心得ている。この小説は、『アシニアム』誌が既に告知している『ウージェーヌ・ルーゴン^{ウージェーヌ・ルーゴン} 狎下 [ママ]』であり、ゾラはこれを連載小説の形で発表し始めている。こうして先行発表する遣り方は、この書にその興味も新鮮味さえも何ら失わせるものではないだろう³⁾。単行本には、出版に関わる現行法により、日刊紙ではカットせざるを得ない多くの文章を盛り込むことになるだろう。

- 1) 『アシニアム』1876年2月5日号、「文学ゴシップ」(p.202)、及び後出、p.96を見よ。この小説は1875年11月6日から『アシニアム』が予告していた。前出2番(p.21)を見よ。1876年3月25日に再び取り上げられた。後出29番(p.68)参照。
- 2) 上院選挙が1876年2月30日に、総選挙の第1回投票が1876年2月20日、第2回投票が3月5日に行われた。
- 3) この小説は1876年2月25日に刊行される。正確な題名は勿論『ウージェーヌ・ルーゴン閣下』である〔マラルメは「Son Éminence Eugène Rougon」と記しているが、正しくは「Son Excellence Eugène Rougon」である〕。マラルメは、1876年3月18日付書簡において、ゾラに小説送付の礼を記し、長々と賛辞を述べている(『詩に関する言葉』、pp.117-118、完全テキストは『ステファヌ・

マラルメのエミール・ゾラ宛の19通の書簡』、パリ、ジャック・ベルナル社、「ラ・サンテーヌ叢書」、1929（1932）年、pp.29-34〔『書簡集』、第2巻、pp.106-108.〕を見よ）。

25. 1876年1月16日——掲載されず

文学ゴシップ¹⁾

『フランス詩とその韻律法、或いはフランスにおける詩を規定する法、そのヴァリエーション、さまざまな時代から引いた例、新旧の詩形』、これが作家F.ド・グラモン氏の名が少なからぬ興味を付け加える書物の題名である²⁾。多かれ少なかれ文学を愛する者なら誰でも読むであろうこの作品は、あの目覚ましい『テオドール・ド・バンヴィルによるフランス詩小論³⁾』の脇に位置を占める。ド・グラモン氏はこれを発展、増補しているのだ。〈作詩法〉の対位法、或いはフーガとも呼ぶことができるであろうもの、即ち何人たりともこの著者と同様に秀でることは嘗てなかった稀な〈律動^{リズム}〉の描写においてさえ、人を惹き付け、明快なものである。

- 1) ルモワースに関するメモは、『アシニアム』1876年2月5日号の「文学ゴシップ」欄、p.202（後出、p.96を見よ）に出た。最後の文は削除された。グラモンに関するメモは取り上げられなかった（1876年1月30日付書簡において、マラルメはオシヨネシーにこのことに関して不平を述べている）。
- 2) フェルディナン・ド・グラモン伯爵（1812-1897）は、自身が詩人であり、エッセイスト。バルザックの友人。児童書の作者で、ヘッツェル社から、刊行者の序文付きで、韻律法の書を出版した。
- 3) バンヴィルの『小論』はソルボンヌのエコー文庫から1872年に出た。第二版は1875年。

26. 1876年1月16日——1876年2月5日

文学ゴシップ

IX (c) その数々の詩節がテオフィル・ゴティエのそれと比肩し得る現

代フランス詩人の一人であるアンドレ・ルモワヌ氏¹⁾は、サンドーズ&フィッシュバシユール社の詩集成に、数年前に刊行された、彼の『全詩集』に加えられ、その続篇が待望されたままだった1巻を出版したばかりである。それは『海の風景と牧場の花と』である。ルモワヌ氏のかくも知られ、非常に多くの愛好者を作った全ての美点が、この作品にも見られるのである。

- 1) アンドレ・ルモワヌ (1822-1907) は、マイナーで、恐らく不当に忘れられた高踏派詩人で、1871年に、ルメール社から『詩集…、1855-1870、魔法使いの女たち、去年の薔薇』を出版していた。

27. 1876年1月30日——1876年2月5日

芝居ゴシップ¹⁾

IX (d) フレデリック・ルメートル²⁾のために、この前の日曜日にロッシが演じるようになっていたにも拘らず、その前日パリがこの気高い喜劇俳優を埋葬することになった上演から残されたものと言え、まず、シャンデリアの前ではなく、墓の傍らでムネ＝シュリーによって詠まれた詩人ジャン・リシュパンの頗る美しい詩句である。我々の情報からすると、それが全てではなく、著者の老いを食い止めることができなくて、その死によって中断されたこの儀式は、イタリア劇場だけでなく、ヴィザンティーニ氏ももたらしたばかりのゲーテ座においても行なわれるだろうと思われる。外国人と同国人による二つの賛辞は、病の費用を弁済し、供養碑の最初の墓石の費用を払う嬉しいこの目的を持つだろう。

- 1) 『アシニアム』1876年2月5日号、「芝居ゴシップ」、p.210、及び後出、p.97を見よ。リシュパンの名前はカットされた。
- 2) フレデリック・ルメートル (1800-1876) は、ロマン派演劇の偉大な俳優であり、1月26日に亡くな^{ラベル}ったばかりであった。ヴィクトル・ユゴーは墓前で追悼演説を行い、これは『喚起』紙に発表され、『行動と言葉、Ⅲ、亡命以降、1870-1885』、パリ、国立印刷所出版、pp.228-230に再掲された（ここでは日付が1月20日と誤記されている）。

28. 1876年2月6日——1876年2月12日

芝居ゴシップ¹⁾

X 一等賞となるべき唯一の作品がないので、二つの芝居が、アメリカ独立百周年を祝してミカエリス氏が命名したコンクール²⁾の入選作として上演された。一つはダルトワ氏³⁾のもの、もう一つは詩人にして劇作家のオーギュスト・ヴィリエ・ド・リラダン氏の『新世界』である。

『反抗⁴⁾』『王位篡奪者⁵⁾』、さらに文芸の世界で有名なその他の作品を書き、上演させてきたこの受賞者は、自ら自作を検討し、アメリカのあらゆる大劇場で同時にその上演を企てるために、フィラデルフィアに出発する意志を表明している。

- 1) 『アシニーアム』1876年2月12日号、「芝居ゴシップ」、p.210に掲載された（後出、p.99を見よ）。
- 2) 1875年11月13日の「芝居ゴシップ」において既に、『アシニーアム』誌は、テオドル・ミカエリスが命名した〈コンクール〉に言及していた。彼は1万フランと名誉のメダルを「4幕か5幕の作品で、最も力強く、百周年が1876年7月4日に当たるアメリカ合衆国の独立宣言の挿話を想起させるだろうフランスの劇作家」（ヴィリエ・ド・リラダン、『新世界』前書き）に提供していた。
- 3) アルマン・ダルトワ（Dartoisまたはd'Artois）（1845–1912）は、ガブリエル・ラファイユとの共同制作『或る偉大な市民』をもってコンクールに参加したのだった。
- 4) 1870年5月6日、ヴォードヴィル座にて上演（5回上演）。
- 5) マラルメは、ヴィリエの書誌には不明の、このタイトルでどの作品のことをほのめかしているのだろうか？ これは、1866年にサン＝ブリューで出版され、当時まだトゥールノンにいたマラルメにヴィリエが送った『モルガーヌ』のことであろうか？ マラルメは『モルガーヌ』と書いていたが、これを抹消したのだった。

29. 1876年3月20日——1876年3月25日

文学ゴシップ

XI ここでまた予告された¹⁾ゾラ氏の小説は、この「〈ゴシップ²⁾」が出る

頃には、フランスの誰もが手にすることができよう。そして皆、この詩人、分析家の力強さ、正確さに感嘆する。注意深い批評家の目には、この作品は、新しい地平を求める〈小説〉の近代的発展において、最も特異な目印の一つを標すものである。こうした文学ジャンルは、虚構の域を残しながらも、〈歴史〉に最も近接する契機である。ゾラ氏の最新の書は何よりも政治的である。そして彼の小説家としての炯眼の想像力が夢みたように思われる第二共和政の典型的な人物たちの下に、誰でも、幾度も巨匠の手でスケッチされた皇帝ナポレオン3世という人物のお供をした当代の夥しい群像を見分けることができるのである。読者を深く魅惑しないとしたら、心配させることになる作り事と現実との驚くべき配分。そして、〈歴史家〉がもはや〈歴史〉の大筋だけ保存すればよいようにするのは、個々の典型的な詳細を、小説のために採取したこの小説家である。

- 1) 『アシニアム』1876年2月5日号に掲載された24番参照 (p.202)。1875年11月6日に出た2番も参照 (前出、p.63 と p.21 を見よ)。
- 2) 『アシニアム』1876年3月25日号、「文学ゴシップ」、p.430 と後出 p.100 を見よ。最後の文がカットされている。この文が恐らく最も重要である。

30. 1876年3月20日——1876年4月1日

文学ゴシップ

XII (a) 非常に注目されている若き小説家、マリウス・ルー氏による『不実の男¹⁾』は、ずっと前からフランスで出版されてきた中で、〈田舎暮らし〉の最良の研究の一つである。著者はこれまでパリの風俗、とりわけカルティエ・ラタン²⁾の風俗の研究をしてきた。正確ではあるが、隠された皮肉であれ、描写的な情熱であれ、とてもあけっぴろげな感情を伴って、常に物事の詩的な見方、これこそ、生彩があると同時にすっきりした、一言で言えば生き生きとした文体で書かれたこの最新作が明るみに出す天賦の才である。

- 1) 『アシニアム』1876年4月1日号の「文学ゴシップ」、p.466を見よ (後出、p.101 参照)。—この小説がダンテュ社から出たのは1875年7月17日であった。

マラルメは1876年5月6日付書簡で著者に恵投の礼を述べ、5月19日には『アシニアム』誌に発表された「ゴシップ」の味気なさを詫びている。マラルメがマリウス・ルー（1840-?）を知ったのは、恐らくゾラを通じてであった。彼はこの偉大な自然主義小説家の同郷人であり、幼友達であった。『詩に関する言葉』、pp.124-125の、1878年4月30日付マラルメのマリウス・ルー宛書簡も見よ。

31. 1876年3月20日——1876年4月1日

美術ゴシップ

XII (b) マネ氏¹⁾は、巨匠にして先駆者として、2年前から戸外の大研究におけるフランス絵画（彼はその首領であるが）の現代の運動の正確な記録を試みている。皆がパリの最新サロンで見ても、ロンドンのフランス芸術家協会の展覧会でも見られるはずなのは、「ボート遊びをする人たち²⁾」と題される絵である。1876年の〈サロン〉に絵を送るために、彼のアトリエを離れたばかりであり、1年前に試みた努力を補うものでもあった。そのタイトルは「洗濯物」である。或るパリの庭の周りの草木の緑と青みがかかった雰囲気の中でまだ乾いていないものを楽しんで洗っている。子供が花々の間から姿を現し、母親の洗濯を見つめている。若妻の体は、今日フランスにおいて誰もが目指している「戸外」がそう望んでいるのと同様に、その女性から堅固でありながらかすんだ様相しか残さない光に、完全に浸っていて、まるで吸い込まれるようだ。この現象は主として肉体、流動的で、周りの空間の中に溶け込むバラ色のシミに関して生じるものである。この作品は、これ自体驚くべきものであり、最も高尚な魅力に恵まれ、現代〈芸術〉の最も決定的な日付の一つを将来にもたらすものである。この作品が後に先駆者の道を辿り、何年も経たないうちに大陸の手法になるだろう新しい知覚の仕方、描き方を丸ごとイギリスに伝授することを望もうではないか。

1) 『アシニアム』1876年4月1日号の「美術ゴシップ」、p.472を見よ（後出、p.101を見よ）。この断章は1875年11月に掲載されなかった13番の部分的再掲である（前出、p.42を見よ）。

- 2) マネの代表作の一つ、現在トゥルネー〔ベルギー南西部の都市〕美術館所蔵の「アルジャントウイユ」のことである。この絵は1875年には酷評されていた。ジャック・ルテーフ『ジャーナリズムを前にした印象派と象徴派』、パリ、A. コラン社、1959年、キオスク双書、p.75を見よ。

32. 1876年4月10日——掲載されず

美術ゴシップ¹⁾

マネ氏によって絵画サロンへと送られた絵のうちの一点、「洗濯物」は、我々が既に述べたように、この画家のキャリアの中でも、現代〈芸術〉の進展の一つの中でも一時代を画するものであった。審査委員会は、自らの役割は何よりも伝統を墨守せんとすることにあり、という誤った考慮に屈して、今年、〈巨匠〉の送った二点を拒絶することを自らの務めと考えた。恐らく公明正大な行為なのだろうが、公衆が、ずっと前から既に夢中になって賛成したり、反対したりする美学的動機をもった作品を、自らの最終判断が及ばないようにすることを要求し得るという点で罪ある行為である²⁾。マネ氏はこのように、そのことを理解しており、これら二点の油絵の〈展覧会〉を自分のアトリエ³⁾で開催して、群衆を自らの努力の証人とすることに熱意を燃やした。この展覧会は、4月15日から5月1日まで、物を考え、観察し、批評するパリの人びとの最も多くが集まる溜り場となるであろう。

- 1) 『アシニアム』誌に掲載された形跡はない。
- 2) マラルメが1874年の記事「絵画審査委員会とマネ氏」において、審査委員会に反対してマネを擁護したのは、こうした言い回しを用いてのことだった。
- 3) サン・ベテルスプール通り4番地にある。

33. 1876年4月10日——掲載されず

文学ゴシップ¹⁾

フェリックス・フランク²⁾による『青春の詩³⁾』は、詩人が精神の円熟期に達し、青年時代の作品を全て一つにまとめた書のうちの一冊である。これらの詩句の著者のかくも自由で、洞察力に満ちた才能に関心のある者なら誰

でも、そして詩句の中に、輝かしい思想の奔放な輝きよりも、高尚な現存のリズムのある、高貴な流れを見るほうを好む者なら誰でも、続けて「花咲く時」（最初の喜び）、「沈む太陽」（最初の悲しみ）、そして「生き生きとした力」つまり〈理想〉への固い信頼によって美化された〈現実〉への回帰というタイトルを持つ数々のページを再読したり、新たに読んだりするだろう。

- 1) 『アシニアム』誌に掲載された形跡はない。
- 2) フェリックス・フランク（1837–1895）詩人。ボナヴァンテュール・デ・ペリエの『世界のシンバル』（1873）、マルグリット・ド・ナヴァールの『エプタメロン』（1881）の刊行者。『ドイツ物語集』（1869）の翻訳者。F. フランクは他にも数々の詩集を出している（『怒りの歌』、1871年、『愛の歌』、1885年）。後に『文芸共和国』に寄稿することになる。
- 3) 『青春の詩、1865–1875』、I. 「花咲く時」、II. 「沈む太陽」、III. 「生き生きとした力」、パリ、ミッシュル・レヴィ兄弟社、1876年。

34. 1876年11月27日——掲載されず

文学ゴシップ¹⁾

テオドール・デュレ氏²⁾は、第一巻、『帝国の崩壊』を出版したばかりである。この書は、同時代の最も興味深い作品の一つで、残りの二巻は『国家防衛』と『ティエール氏の大統領職』であり、総題は『4年の歴史（1870–1873）』である。

著者は真摯に、そして恐らくこれほど壮大な仕事としては初めて、歴史を扱う近代的な手法に手を染めている。即ち、同時代のこと、自らほぼ荷担したことしか決して語らないが、また最も完璧な客観性を目指し、あらゆる派閥からも個人的共感からも完全に離れようとするものである。これらは一見相反するように見える課題である。概観は作家の口から語られないが、読者にとっては、史実の完璧な調整から自ずと沸き出て来る。かくして、古い歴史のあらゆる想像力豊かな装置を捨てる様相を呈する作品は、その意識的で、博識な単純さにおいて、最も高度な射程をもった芸術作品のままであり続ける。

1) 『アシニアム』誌に掲載された形跡はない。

2) テオドール・デュレ (1838-1927)。フランスの歴史家、政治評論家、美術評論家、マネとホイッスラーの伝記作者、『印象派の画家たち』(パリ、エマン&プロワ社、1878年)に関する最初の書物の著者。1871年から1872年にかけて、チェルヌスキ〔1821-1896、イタリア出身の政治家、銀行家〕と共に、大東方旅行を敢行し、その報告を書いている。彼の『4年の歴史』は1876年にシャルパンティエ社から刊行された。マラルメの近い友人であり、彼と相当数の書簡を交わしている。卓越した美術批評家であるデュレは、極めて早くから同時代の偉大な芸術家たちを見分けることのできる非常に的確な眼を持っていた。—『帝国の崩壊』に関する記事が掲載されなかったのは、彼の情報が、1877年11月10日の『アシニアム』に掲載された『4年の歴史』の次の巻に関する「ゴシップ」に繰り返されたからであろう。—『アシニアム』の蒐集に関して言えば、この「ゴシップ」は、マラルメのイギリスの友人の一人、イングラムによるものである。

(完)

訳者後記

本稿は、マラルメのフランス語原稿の翻訳の続き、第5回にして最終回である。

底本にしたテキストは以下の通りである。

1. Mallarmé, *Œuvres complètes*, II, Édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2003, pp.416-440, 1698-1702. [今回訳出したのは、pp.434-440, 1701-1702.]

2. *Les gossips de Mallarmé, Athenaeum 1875-1876*, textes inédits, présentés et annotés par Henri Mondor et Lloyd James Austin, Paris : Gallimard, 1962, pp.19-75. [今回訳出したのは、pp.60-75.]

現在までのところ公刊されているマラルメの書いたメモと、実際に『アシニアム』誌に掲載された断片の、双方の日付の一覧を示せば、以下のようになる。

No.	書簡日付	No.	Athenaeum 日付	gossip 種類	新全集Ⅱ pages	備考
		1	June 26, 1875	literary		
		2	Sept. 4, 1875	literary		
0	18 octobre 1875.		Oct. 23, 1875	dramatic	416	
1	Octobre 1875.	3	Nov. 6th, 1875.	(fine art ?)	417	
2	Octobre 1875.	3	Nov. 6th, 1875.	(literary)	418	
3	Octobre 1875.	3	Nov. 6th, 1875.	(literary)	419	
4	Octobre 1875.	3	Nov. 6th, 1875.	(dramatic)	419	
5	7 novembre 1875.	4	Nov. 13, 1875.	literary	420	
6	7 novembre 1875.	4	Nov. 13, 1875.	literary	421	
7	13 novembre 1875.	5	Nov. 20, 1875.	literary	422	
			Nov. 20, 1875.	literary	422	
8	13 novembre 1875.	5	Nov. 20, 1875.	literary	423	
9	13 novembre 1875.	6	Nov. 20, 1875.	fine arts	424	
10	13 novembre 1875.		Non paru.	dramatic	424	
			Nov. 20, 1875.	dramatic	424	
11	21 novembre 1875.		Non paru.	fine-arts	425	
			Non paru.	fine-arts	425	
			Nov. 27, 1875,	fine-arts	426	sauf le dernier paragraphe
12	21 novembre 1875.	7	Nov. 27, 1875,	literary	426	
13	21 novembre 1875.		Non paru.	artistic	427	
			Non paru.	artistic	427	
14	21 novembre 1875.		Non paru.	literary	428	
			Non paru.	literary	428	
			Non paru.	literary	428	
			Non paru.	literary	428	
			Non paru.	literary	429	
15	27 novembre 1875.	8	Dec. 11, 1875.	literary	429	
16	27 novembre 1875.	8	Dec. 11, 1875.	literary	430	
17	27 décembre 1875.	9	Non paru.	literary	430	sauf la dernière phrase
17 ^{bis}	Décembre 1875.		Dec. 18, 1875.	literary	431	
				artistic	432	
18	3 janvier 1876.		Non paru.	dramatic	432	
			Non paru.	dramatic	433	
19	9 janvier 1876.	11	Jan. 15, 1876.	literary	433	

No.	書簡日付	No.	Athenaeum 日付	gossip 種類	新全集Ⅱ pages	備考
20	9 janvier 1876.	11	Jan. 15, 1876.	literary	433	
21	16 janvier 1876.	12	Jan. 29, 1876.	literary	434	
22	16 janvier 1876.		Mar. 18, 1876.	literary	434	
23	30 janvier 1876.	13	Feb. 5, 1876.	literary	435	
24	30 janvier 1876.	13	Feb. 5, 1876.	literary	435	
25	16 janvier 1876.		Non paru.	literary	436	
26	16 janvier 1876.	13	Feb. 5, 1876.	literary	436	
27	30 janvier 1876.	13	Feb. 5, 1876.	dramatic	436	
28	6 février 1876.	14	Feb. 12, 1876.	dramatic	437	
29	20 mars 1876.	15	March 25, 1876.	literary	437	
30	20 mars 1876.	16	April 1, 1876.	literary	438	
31	20 mars 1876.	16	April 1, 1876.	fine-art	438	
32	10 avril 1876.		Non paru.	fine-art	439	
33	10 avril 1876.		Non paru.	literary	439	
34	27 novembre 1876.		Non paru.	literary	440	
		18	Aug. 19, 1876	literary		
		19	Oct. 7, 1876	literary		
		20	Dec. 23, 1876	literary		

注) *Athenaeum* の日付のみが記されている記事は、底本 2 に採録されていないため、訳出してはいない。*Athenaeum* 原本を基に訳出する必要があるが、別の機会にしたい。

体裁は、前稿を踏襲している。本稿の中には、底本 1 の新ブレイアード版全集による新たな原稿の発掘はない。

本稿をもって、この翻訳シリーズを締め括ることになる。本来、『全集』に収められたマラルメ自身のメモをまず最初に翻訳するのが、時間的順序から言っても常道であった。しかし、私としては、マラルメ自身の手になるものではないために、当然のことながら『全集』に収められることもなく、したがって、読まれることも稀である『アシニアム』誌の英語原稿を先に翻訳し、マラルメ研究者の便に供したつもりである。

だが現実には、この翻訳活動そのものが、ことマラルメ研究者の間に限っ

でも、さほど評価されたとは思っていない。このようなマイナーなテキスト群には殆どの人が目もくれない。或いは、ざっと目を通せば、何が書いてあるかくらいはわかる、だから、こんなことに時間は使わない、というのが大方の人の態度であろう。世の中の大勢がそうなのだから、取り敢えずはこれを多とするとっておこう。告白すれば、自分自身もまともな論文を書くにはじっくり時間を掛ける必要があるため、そういう時間が取れない間のモラトリアムというつもりもあった。だが、本当の研究というのは、こうしたマイナーなテキストの一つたりとも疎かにしないことではないのか。商業ベースに乗る公共出版物というのは、編集の都合上、真の意味での翻訳全集にはならないのが常である。それゆえ、そこから漏れたテキスト群をこうして、日本語で読める形にするのもそれなりに意味はあろうかと思う。翻訳とは、テキストを丁寧に読むことである。私は主要作品だけを対象にして、エッセンスだけを巨視的に捉えて論じ、大論文を書き終えたら別の作家の研究へとシフトしていくという研究態度を好まない。だが、大物と言われる研究者ないし評論家、思想家、哲学者の類の取る態度は悉くこのようなものである。研究の分野にすらエコノミーの論理が支配している。私は評価されないことを百も承知で、「一寸の虫にも五分の魂」というつもりで続けてきた。だが、この活動もこれをもってひとまず終りとしたい。これからは論文を発表する番であろう。その覚悟で、大学にささやかながら籍を置く限りでの自分の残り少ない時間を有効活用して、マラルメ研究者としてのアイデンティティーを示したいと思っている。

ここで確認できることとしては次の諸点を挙げることができよう。

まず、マネの「戸外」の理論が再三取り上げられている（13番、31番）。この時期の詩人の関心の在り処が確認できる。34番からも読み取れるように、この時期のマラルメは、マネの手法からヒントを得て、「単純さ *simplicité*」に重きを置いているように見える。これは言うまでもなく、あの圧縮され、無駄を極限まで削ぎ落とされた後期の文体へとつながる要素である。ここではこうしたマラルメの根本的な認識がまだ生硬な形で表現されている。ゾラや自身の作品の告知、『文芸共和国』誌の宣伝も忘れていない。また、当時

の演劇史との関わりで、ここで取り上げられた劇作品の数々は注目すべきものであり、マラルメの目に留まった作品のそれぞれの内容を検討することで、マラルメの実作品との関わりへのアプローチが可能になるだろう。実はこうした地道なマラルメ研究はまだ殆ど行なわれていないと言ってもよい。英訳者オシヨネシーを難儀させたのが想像に難くない、マラルメ特有の息の長い、破格的な文も見逃せない。だが、マネに関するメモは、英国側の好みに合わなかったようで、極めて限定的にしか掲載されず、これに不満をもったマラルメが、この活動から早く手を引くことになったことは、広くマラルメ研究者たちの知るところである。

今回も、読者各位には原文を片手に検証していただき、誤りの指摘やさらなる詳細を寄せていただくことを期待したい。